国字研・漢字指導法研究会の創設のころ

2026 7 25

見城　慶和

第二次世界大戦の敗戦後の民主改革の大きな柱として、財閥解体・農地解放・男女同権・女性参政権などと並んで、漢字使用の制限である当用漢字の実施があげられる。

昭和２１年１１月１６日の　内閣告示　(吉田茂)は

漢字の無制限使用がもたらす情報の偏りが、国民を無謀な戦争に駆り立てる大きな要因になったという反省からの、漢字使用の制限であった。

こうした反省から当用漢字 1850 字と 881 字の教育漢字が制定された。昭和１２年生まれで戦後の新制中学校の四期生として学んだ私などは,中学校卒業までに 881 字の教育漢字を習得すればよかった。

ところが時代が下るにしたがって，当用漢字の範囲内での漢字使用制限が，使用の目安となり、昭和 52 年(1977 年) 1 月の第十二期国語審議会では『新漢字表試案』が出され、字数も大幅に増やされたばかりか、使用の制限も取り払われ、『使用の目安』という改悪が打ち出された。

国字政策のこうした反動的な『新漢字表試案』が発表された直後に，大久保忠利先生の呼びかけで国字問題研究会が旗挙げされた。

「児童言語研究会」や「日本ことばの会」、「カナモジカイ」などから次のようなメンバーが創設期の国字研に参加した。

大久保忠利・内山みち子・小林喜三男・大倉孔一・渡辺武・渡辺知明・高柳正次・見城慶和田中積・関正次…少し後から三宅研太郎さんが参加し，続いて田村利樹さん・紺屋冨夫さんなどが入会されて５０年になろうとする歴史を歩んで来た。(カナモジカイから黒滝チカラさんも)

国字研の初代会長は、『日本ことばの会』の内山みち子さんが担われた。

国語国字問題に関する主な著作としては、大久保忠利著『一億人の国語国字問題』1978 年 6 月三省堂刊・『漢字と教育、漢字教育はどうあるべきか』1986 年 9 月一光社刊のほかに国字問題研究会が、常用漢字表の批判として刊行した『美しい日本語と漢字の教育』1981 年 10 月あゆみ出版刊行や，田村利樹・乗木養一・紺屋冨夫編著『子どもが変わる漢字の指導』2002 年 5 月　下町人間総合研究所発行…などがある。

国字問題研究会発足の呼びかけから，会の研究・運動をリードしてくださった大久保忠利先生が８１歳で亡くなられたのは 1990 年(平成 2)6 月 1 日のことであった。その年の国字研夏季アカデミーで黙祷を捧げたことをつい昨日のことのように思い出す。